日本小地理

高等科
教科用

上卷

375.9
Fu26
資料室

30524
教科書文庫
3
291
42-1893
20000
17681

資料室
中央図書館
3757
Fu26

文學士 天野爲之閲
冨山房編輯所編纂

日本小地理 上卷

東京 冨山房藏版

広島大学 教 17681 図書

日本小地理上卷

目次

地理用語の解 一
山丘 坂 山脈 火山
谷 原 河 泉 瀑 湖
海 海岸 島 岬
第一篇 總說 三
位置 四
境界 四
區劃 四
地勢 六
山嶽 六
火山 七
川流 八
湖沼 九
瀑布 九
原野 九
沿海及び港灣 十
都會 十一
東京 十二

大坂　十三
京都　十三
五港　十四
其他全國の都會　十六
交通　二十二
鐵道　二十三
航路　二十三
郵便　二十四
電信　二十四
氣候　二十四
生業及び産物　二十五
農業　二十五
漁業　二十五
工業　二十六
商業　二十七
邦土の分畫　二十七

日本小地理上卷目次終

廣島大學圖書之印

日本小地理上卷

文學士　天野爲之閲
富山房　編輯所編纂

江波村文庫　教會所

地理用語の解

山、丘　陸地の小しく高き處を丘と云ひ、丘の大なるものを山と云ふ、山麓とは山の上り初めの處にして、山頂とは山の最高の處なり、而して其中間を山腹と云ふ。

坂　山頂又は山腹にして、人の上下する路を坂と云ひ、坂の登りつめたる處を峠と云ふ。

山脈　山の長く相連りたるを山脈と云ふ。

火山　烟、砂石、灰燼等を噴出する山を火山と云ふ。

谷　丘又は山の間にある低き地を谷と云ふ。

原　廣くして平かなる地を原と云ひ、原の開墾耕作する處を田野と云ふ、森林とは樹木繁茂せる原にして、荒

原とは雜草の發生せる原を云ふ、又原の高き處を高原と云ひ、低き處を低原と云ふ。

河　河は地上を流るゝ水の名にして、其水の發する處を河源と云ひ、其水の流れ注く終を河口と云ふ、而して河水の流るゝ兩側を

海岸と云ひ、本流に注く他の小流を支流と云ふ。

泉　泉は地中より湧き出つる水にして、多くは河源となるものなり。

瀑　瀑とは高き處より落つる水を云ふ。

湖　陸の凹みたる處に集れる淡水を湖と云ひ、其小なるを池と云ふ。

海　陸地諸水の注入する處を海と云ひ、其大なるを洋と云ふ、灣とは海水の陸地に入込みたる處にして、ろの深くして船舶の碇泊に便なる處を港と云ふ、陸地と陸地との間の峽き海を海峽といふ。

海岸　陸地の海に濵する處を、海岸又は海濵と云ふ。

島　四方水に圍まれたる小なる陸地を島と云ひ、島の一部陸地に連りたるを半島と云ふ。

岬　水中に斗出する陸を、岬又は崎と云ひ、細き陸地の海水に夾まれたるを地峽と云ふ、砂石積りて海水の淺き處を洲と云ひ、岩石海底に隱れて航行に害ある處を暗礁と云ふ。

日本小地理

第一篇　總說

我か大日本帝國は、亞細亞洲の東部に位し、山水秀美氣候温和にして、上に萬世一系の天皇をいたゞき、下に四千萬の人口を有する一大文明國なり。

このうるはしき國に生れたる人々は、誰かこの國の地理を知ることを欲せざらん、地理を學びたる人は、國土のさまを居ながらに知るを得べきのみならず、自ら旅行する時などは、大なるたよりと愉快とを得べし。

位置。　我大日本帝國は、四つの大島と數多の小島とよりなれる島國にして、中央にありて最も大なる島を本州といひ、その西南にある二大島は、大なるを九州といひ、小なるを四國といふ、北海道は本州の北方にあり、而して北端には千島群島あり、南端には琉球諸島あり、又別に小笠原群島ありて本州の南方に散在せり。

境界。　我國の四面は皆海にして、北はヲコツク海をへたてゝ、ロシヤ國の領土に境し、西は日本海と黄海とをさしはさみて、朝鮮支那の二國にとなりす、東南の兩岸は大平洋にのぞみ、東方ははるかにアメリカ洲と相對す。

區劃。我國の面積は、大約二萬四千七百九十四方里にして、之を大別して一畿八道とし、更に之を小別して八十五國とす、今ろの國名をあぐれば左の如し。

畿内五ケ國

山城、大和、河内、和泉、攝津。

東海道十五ケ國

伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相摸、武藏、安房、上總、下總、常陸。

東山道十三ケ國

近江、美濃、飛驒、信濃、上野、下野、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後。

東海北陸兩道の間にありて、海に瀕せざる近江、美濃、飛驒、信濃、上野、下野の六國を中仙道と稱し、磐城、岩代より羽後に至るの七國を、奥羽とも稱せり。

北陸道七ケ國

若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡。

北海道十一ケ國

渡島、後志、石狩、天鹽、北見、膽振、日高、十勝、釧路、根室、千島。

山陰道八ケ國

丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐。

山陽道八ケ國

播摩、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門。

山陰山陽、兩道を、あはせ稱して中國ともいふ。

南海道六ケ國

紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐。

紀伊、淡路二國をのぞきて四國と稱す。

西海道十二ケ國

豐前、豐後、筑前、筑後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬、琉球。

壹岐、對馬、琉球の三國をのぞき、その他を併せ稱して

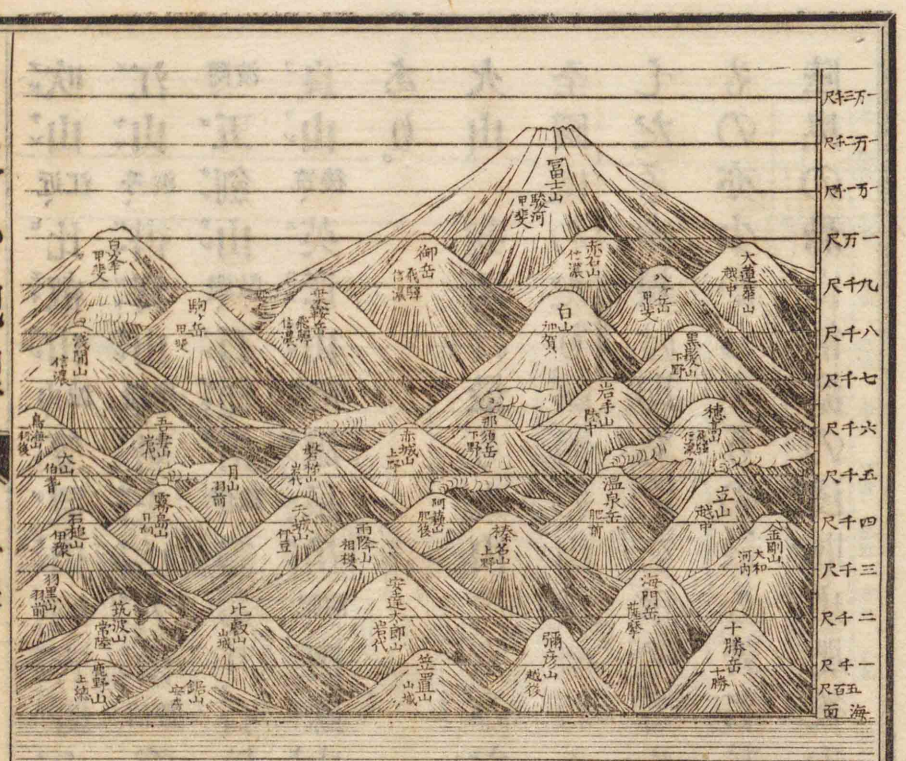
九州といふ。

地勢。地圖を見よ、我國の地勢は、西南より東北に向ひて斜にまがり、恰も弓形をなせり、これ即ち我國のれもなる二大山系の方向によれるものなり、その西南よりれとりて、東北にのぶるを支那山系といひ、その北より來りて、南にはしるを樺太（カメフト）山系といふ、この二大山系の相會するところは、本州の幅員最もひろく、地勢また最も高峻なるところにして、かの白扇さかさまに、東海の天にかゝれる如き富士山は、正にこの兩山系の會合點にあり。

兩山系の會合するところに於て、富士山の一帶南北にわ

たりて、我國を兩斷するを見る、このところを以て我國を二分し、以北を北日本といひ、以南を南日本といふことを得べし、南日本は最もふるく王化に浴し、北日本はやゝおそく開けたり。

山嶽。我國第一の高山は富士山にして駿河、甲斐の間にまたがり、峰頭常に白雪をいただき、山容の秀でたるを以て、其名世界に高し、飛驒、信濃の境にある鎗岳、御岳、乘鞍岳等はこれに次ぐ高山にして、白峰（甲斐）、赤石山（信濃）、駒ケ岳（甲斐）、大連華山（越中）、八ケ岳（甲斐）、立山（越中）、白山（加賀）等また之につぐ、之れ皆本州の中部、兩山系會合點の邊にあるを見れば、この地方

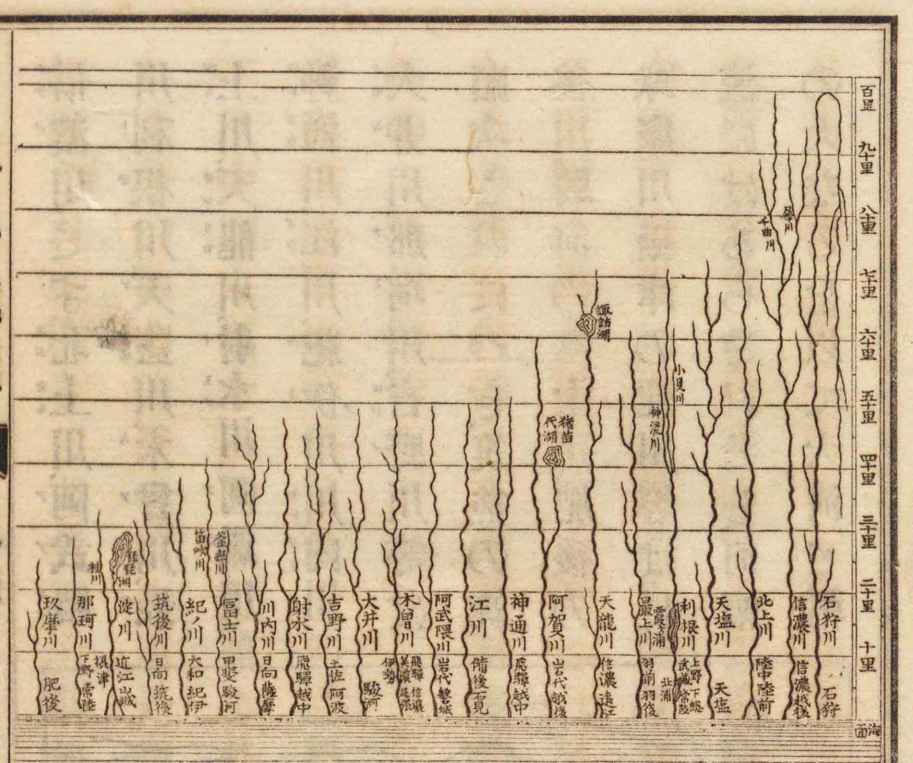


のいかに高地なるかを知るべし、その他北日本にありては、十勝岳（十勝）、石狩岳（石狩）、恐山（陸奥）、吾妻山（岩代）、盤梯山（同上）、鳥海山（羽後）、月山（羽前）、湯殿山（同上）、羽黒山（同上）、筑波山（常陸）、赤城山（上野）、榛名山（同上）、妙義山（同上）等その名最も高し。

南日本には、戸隱山（信濃）、膽

吹山（近江）、比叡山（山城）、笠置山（上）、吉野山（大和）、金剛山（大和河内）、高野山（紀伊）、大江山（丹波）、書寫山（播磨）、船上山（伯耆）等あり、四國には雲邊寺山（阿波）、五劍山（讃岐）、石槌山（伊豫）等あり、石槌山最も高し、九州には高良山（筑後）、英彦山（豐前）、溫泉岳（肥前）、阿蘇山（肥後）、霧島山（日向）、開聞岳（薩摩）等あり。

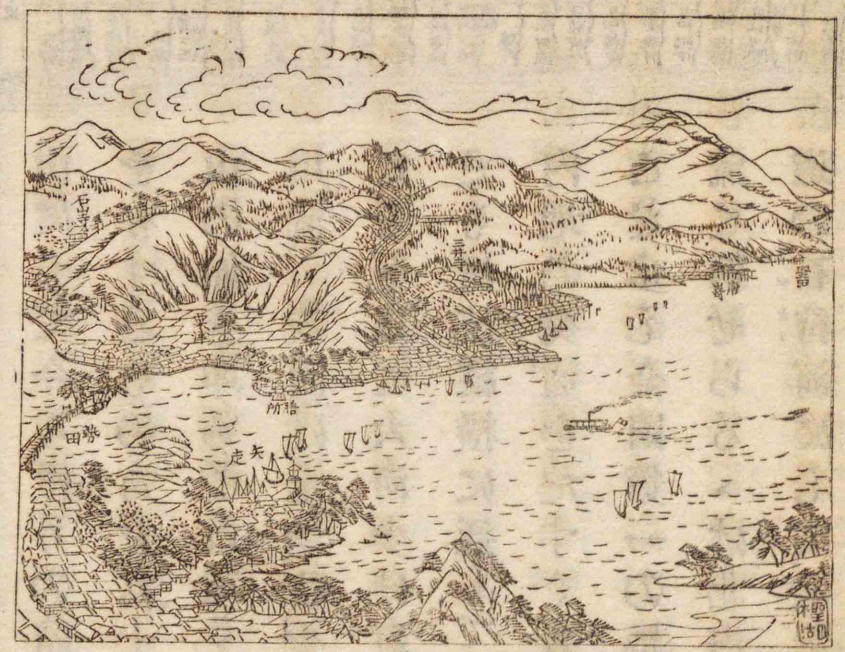
火山。　我國は最も火山に富みたる國にして、火山系殆ど全國にわたり、諸國の山岳概ねこれに連れり、上圖に現はしたる赤線は、即ち之を示せるものにして、現時烟をはくもの亦少からず、その最も著名なるものは、釧路の硫黃岳、陸奥の恐山、信濃の淺間山、肥後の阿蘇山等にして、昔時火



山にして今なほその蹟を存するものあり、富士山の如き即ちこれなり。

川流。　我國は土地狹少なるを以て、大河少けれども、河流縱橫に通して、內地の交通をたすくること多し、全國第一の長流と稱せらるゝは、北海道の石狩河にして、次を

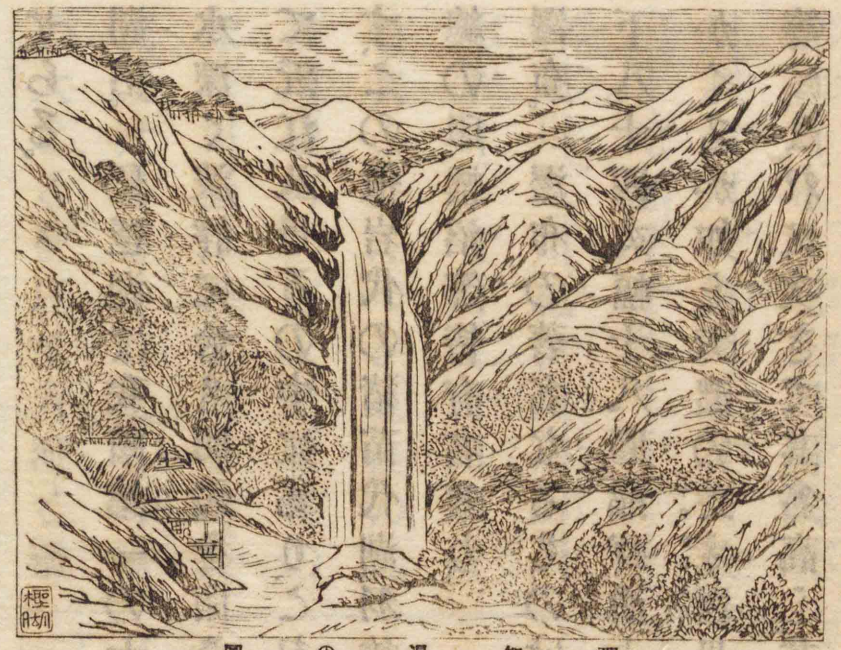
信濃川とす、北上川、阿武隈川、利根川、天鹽川、木曾川、最上川、天龍川、射水川、阿賀川、神通川、江川、紀伊川、川内川、大井川、那珂川、吉野川等は順次とれにつぎ、筑後の筑後川、駿河の富士川、肥後の球摩川、攝津の淀川等は、長流にはあらざれども、河幅の大なるを以て大河と稱



せらる。

湖沼。琵琶湖は我國第一の大湖にして、周回凡七十三里、水深く波靜に恰も明鏡を開きたるが如く、風色絶佳にして近江八景ろの中にあり、とれにつぐを常陸の霞ケ浦とす、この他岩代の猪苗代湖、羽後の八郎潟、出雲の宍道湖、下總の印幡沼等皆有名なり。

瀑布。瀑布の著名なるものは、紀伊の那智瀑を最とす、直下八十四丈幅十八間、熊野浦より之を望めば、恰も白布をかくるが如し、美濃の養老瀑、丹後の布引瀧、下野の華嚴瀑等は、とれに次ぎて其名高し、其他石狩の石狩瀑、飛驒の白



那智瀑の圖

水瀑（ミヅタキ）、伊豫の高瀧（タカタキ）等は皆直下百數十丈、或は二百丈餘の大瀑なり。

那智瀑の圖

原野。先づ北海道よりしるさんに、北海道には石狩の平原と稱する平原ありて、石狩川にろひ地味肥沃なり、十勝、釧路の兩野また頗る廣し。

本州の北方には奥の平野あり、北上、阿武隈、兩河にろひて、陸前、磐城、岩代にわたる大平野なり、山形、米澤の平野は、最上川の上流沿岸に連り、越後の平野は、ろの東北部の海濱一帶をつゝみ、信濃、阿賀の二大河此間を流下す。

關東八州の平野は、利根川の兩岸にひろがり、東西南北凡三四十里、古來名たかき武藏野原は、即ちろの一部なり。

尾張の平野は、木曾川にろひ、畿内の平野は淀川と、大和川との沿岸にあり、讃岐の平野は四國第一の廣野にして、九州にては筑前の平野を第一とす、皆土地肥沃にして田畝遠くひらけたり。

沿海及び港灣。我國の海岸線は、極めて長く良港大灣また隨うて多し、本州の西端には下の關の海峽あり、ろれより瀨戸の内海を過ぎて、北に鳴戸東に由良の海峽あり、之を入れば大坂灣にして、西は明石海峽を以て播磨灘に通ずべく、南の方海岸にろひて進めば、紀伊に田邊灣あり、紀伊の南端に斗出せる、潮崎以東の沖を熊野洋といふ、ろれより志摩の大王崎をへて伊勢海に入る。

三河の伊良湖崎より、伊豆の石廊崎に至るの外面は、遠江灘と稱し、駿河灣ろの中にあり、伊豆と相摸の間には相摸洋あり、之をめぐれば東京灣に入るべし。

上總の沿岸犬吠崎利根河口に至る間を、九十九里濱と稱し、有名なる鰯の漁場なり、犬吠崎より以北、常陸一帶の海洋を鹿嶋洋といふ。

鹿嶋洋の以北、津輕海峽に至るまでは、港灣の大なるものは甚だ少く、唯ろの中央に仙臺灣あるのみ。

津輕海峽を過ぎて、本州の北端に陸奥海あり。

本州の西海岸は、屈曲極めて少く、唯僅かに富山灣、若狹灣及び出雲の諸港あるのみ。

北海道の沿岸は、大半平直にして唯西部の海岸はやゝ屈曲あり、津輕海峽の北を箱館灣といふ、ろれより東の方、惠

山岬を廻りて噴火灣に入るべし、根室の納紗布岬の北方に、根室の大灣あり。

四國には南に土佐沖あり、蹉跎岬と室戸崎東西にありて、ろの兩端をさしはさめり。

九州は全國中最も岬角、港灣にとみたる海岸を有する土地にして、西海岸を殊に甚しとす、北に玄海洋あり、西に有明天草の二洋あり、東南に日向洋あり、而して南方に鹿兒島灣ありて、櫻島山の火山、烟をこの中に噴けり。

都會

我國繁華の都會を知らんと欲せば、まづ三府より學ばざるべからず、三府とは東京、大坂、京都をいふ、

東京。　東京は武藏國にあり、東京灣にのぞむ、むかしは武藏野の原と稱し、（太田道灌の歌に露おかぬくさもありけり夕立ちのそらよりひろきむさしの、はら）一望際なき荒野なりしが、今より凡三百年前、德川家康幕府をこの地にひらき、江戸城と稱せしより、遂に全國にたぐひなき都府となれり。

明治二年　今上天皇都をこの地に定めさせたまひしより、改めて東京と稱す、宮城は市の中央にありて、諸官衙及び議院、邸宅ろの周圍にならび、皆宏壯をきはめたり、街路の最も繁華なるは、新橋より上野淺草に通ずるところ

皇城二重橋の圖

にして、市内縱横に溝渠を通ゞて水運を利し、鐵道各地に通ゞて陸運の便あり、百貨輻湊して我が國商工業の中心たり。

又市外近傍の勝地には、龜井戸の梅花、墨田堤及び飛鳥山の櫻花、瀧の川の紅葉、團子坂の菊等ありて、春秋のながめにと

墨田堤の圖

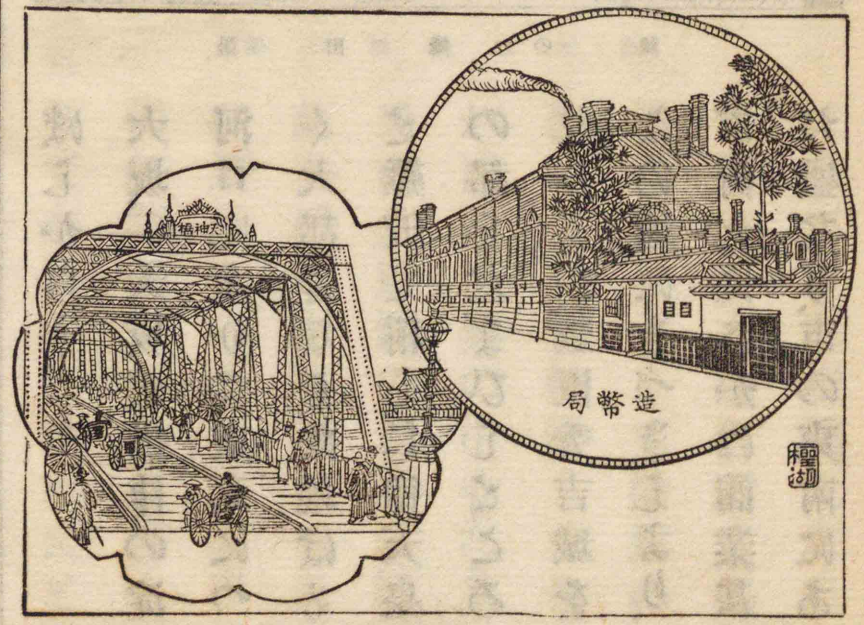
ぼしからず。

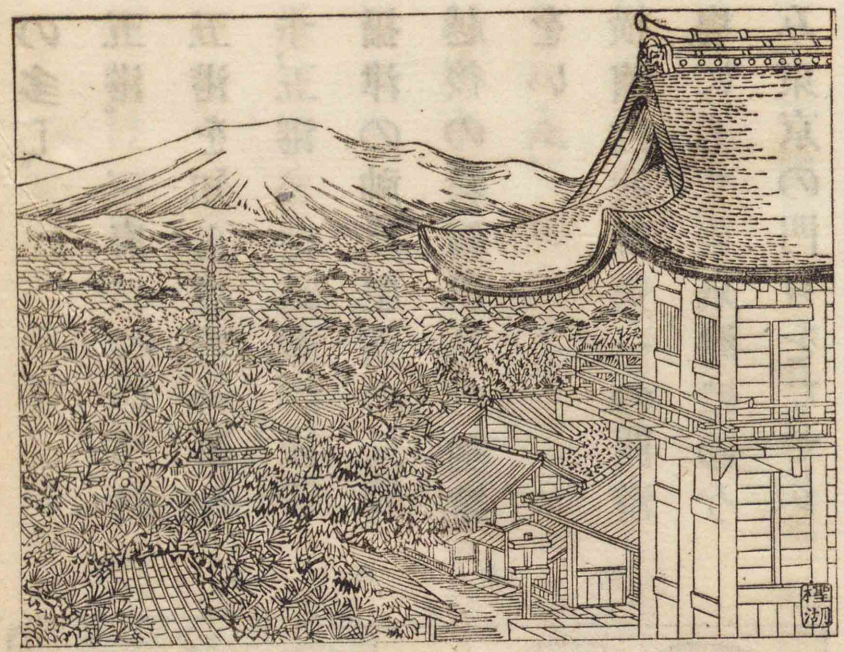
大坂。大坂は攝津の淀河口にありて、東京につぐ大都會なり、此地はもと難波と稱し、仁德天皇の都したまひしところなりしが、豐臣秀吉城をこの地にきづきしより、市街大にさかゆ商業甚だ盛なり、市の東南にあ

る四天王寺、北方にある天滿宮等は、市人遊覽の勝地とす。

京都。　京都は山城の中央にありて、今を距ること千百年前　桓武天皇皇居をこの地にさだめたまひしより、明治の初年に至るまで、千餘年間の帝都なりき、町なみ正

造幣局の圖





清水閣より京都市街を望む圖

しくして道路四方に通じ、加茂川の清流ろの中をつらぬき、比叡鞍馬、愛宕の山々三方をかこみて、南の方一面遠く開けたり、山水明媚にして名勝舊蹟甚だはなはだ、春は嵐山の櫻花あり、秋は高尾の紅葉あり、四季の景色人目を喜ばしむるも

の多し。

五港。　三府についでは五港を知らざるべからず、五港とは、武藏の横濱、攝津の神戸、肥前の長崎、越後の新潟、渡島の函館をいふ。

横濱は我國第一の開港場にして、東京灣にのぞみ、東京の門口をなせり、

五港の圖

殊に我國第一の輸出品、生絲の輸出港たるを以て、內外船舶の出入日夜たえず。

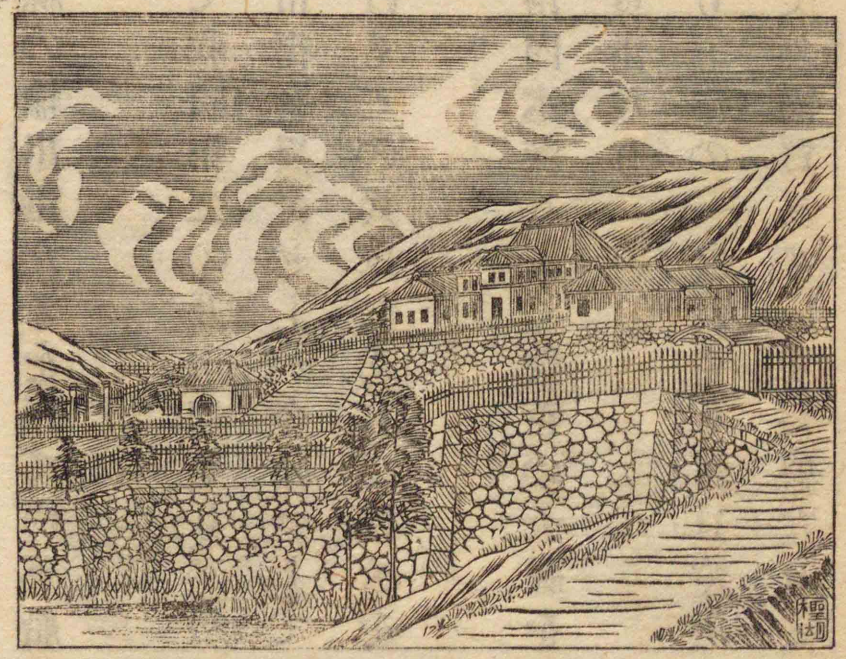
神戸は攝津の西部にありて、我國第二の互市場なり、港川を挾みて兵庫と連る、もと市街を異にせしが、今は合して神戸市となれり、湊川神社はもとの兵庫にありて楠公を祭れり。

長崎は土地せまけれども、港內水深く、よく數百の大艦をいるゝに足る、西海第一の良港なり。

新潟は信濃川の河口にあり、五港の一なれども、河口遠淺にして碇船に便ならず、隨て外國貿易もいまだ盛なりと

いふべからず。

函館は青森を距ること二十餘里、山を負ひ灣をひかへ、灣内水深くして碇舶によろしく、北海道の貨物の出入は、概ね此の地によるを以て、船舶の往來頗るしげく、海産物の輸出最もさかんなり。



北海道廳の圖

仙臺市の圖

ろの他全國都會の大なるものをあげんに先北海道にありては札幌を最とす、札幌は石狩にあり、北海全道の都會にして、西は小樽港に、東は幌内炭山に鐵道を通し、市街繁盛なり、膽振の室蘭港、根室の根室港等は、現今甚だ盛ならずと

いへども、近年人口大に繁殖し、市街漸く盛大に赴かんとす。

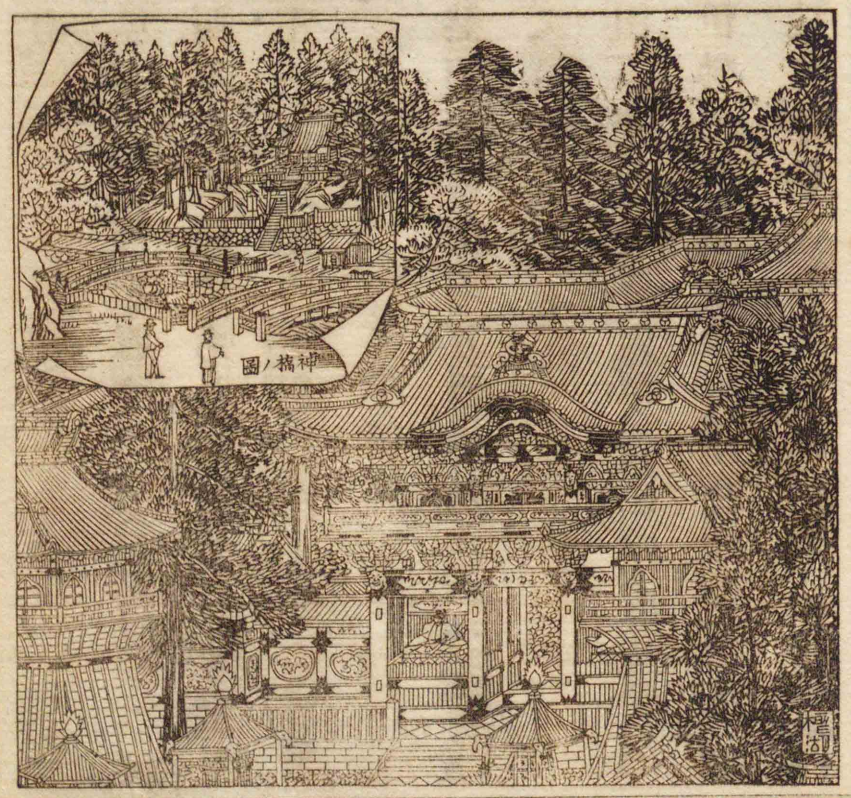
奥羽にありては仙臺を最とす、仙臺は陸前にあり、人烟の繁盛なること東山道第一とす、仙臺を距ること五里、ばかりに、松島の勝地あり。

ろの他陸中に盛岡あり、陸奥に青森、弘前あり、羽前に山形、羽後に秋田、岩代に福島、白河等あり、皆繁華の都會なり。

中仙道に於ては、下野に宇都宮あり、宇都宮の西北に日光山あり、東照宮を祭る、建築の壯麗海内無双と稱す、山中に瀑布多く風景また頗る美なり、上野には高崎、前橋あり、製絲の業盛にして、市況殷富なり。

信濃には長野、松本あり、長野は信濃北部の都會にして、有名の善光寺あり、松本は信濃南部の都會にして、生絲を以て著るろの他美濃に岐阜、大垣、近江に

日光廟の圖

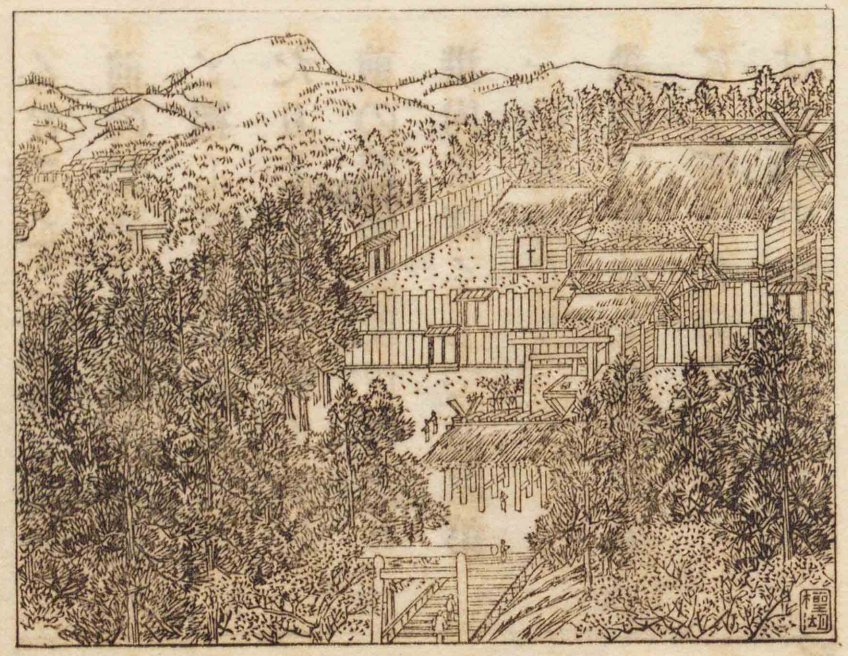


大津、長濱等の都會あり。

東海道の大都會は、尾張の名古屋を推す、名古屋は三府につぐ大都會にして、東西兩京の間にありて、商業最も盛なり、市北に舊城あり、天主閣上黄金の鯱（シャチホコ）をいたゞくを以て、金城の名いちぢるし。

市の南方につゞきて熱田の市街あり、熱田神社（日本武尊と草薙の劍を祭れり）あるを以て、單に稱して宮ともいふ。

常陸の水戸、相模の小田原、駿河の靜岡、甲斐の甲府、遠江の濱松、三河の岡崎、豐橋、伊勢の桑名、四日市、津及び宇治、山田等は皆著名の市街にして、宇治には我國の宗廟内宮（天照皇大神を奉祀す）あり、山田には外宮（豐受大神を奉祀す）あるを以て、諸國より參宮の旅人、皆この地にあつまる。



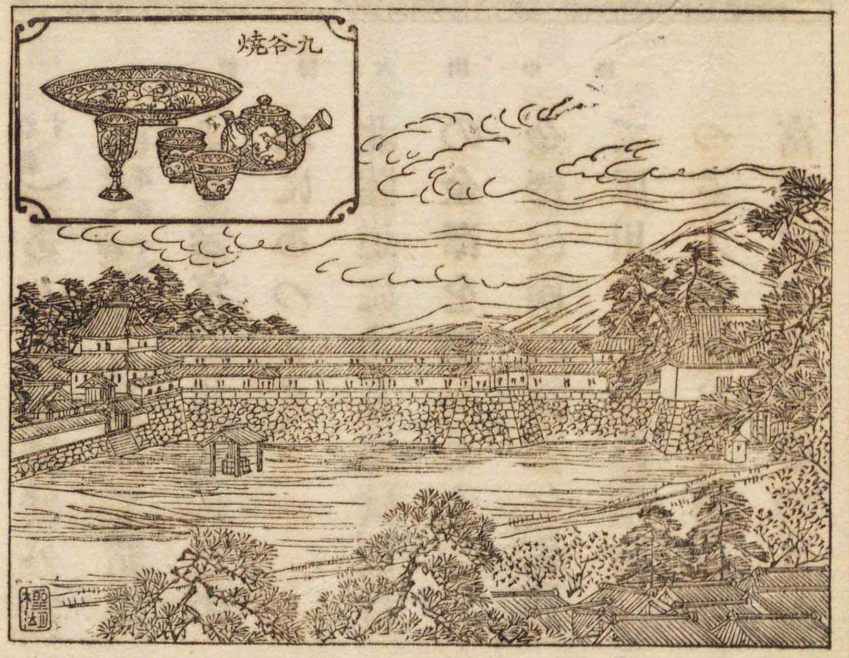
伊勢大廟の圖

北陸道にありては、加賀の金澤を第一とす。

金澤は國の東部にありて犀川にのゞみ、横濱につぐ大都會なり、越中の富山は、古來賣藥のさか

んなるところにして、越前の福井は、往時北の莊と稱し、柴田勝家の居城たりしを以て名あり、越前の西部に敦賀港あり、港内水深くして北陸第一の要港なり。

金澤の圖



畿内は昔時全國の首部にして、歷代の天皇多くはこの中に都したまひ

吉野山の圖

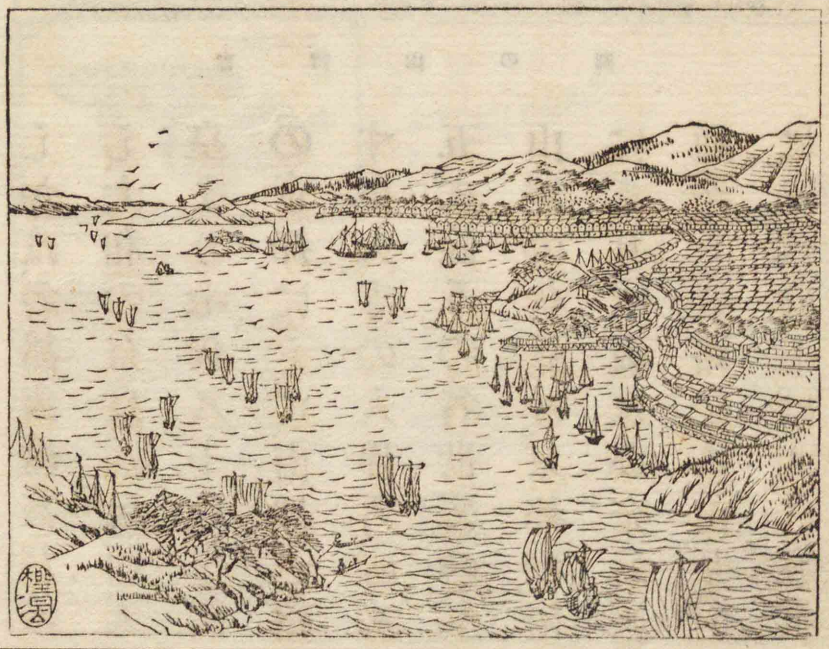
しかば、名都舊邑甚だ多し、大和の奈良は、元明天皇より七代、八十餘年間の帝都にして、南都と稱す、東大寺の大佛、石の丈五丈餘りの名世に高し。

山城の伏見は、京都の南にあり、京坂及び奈良に通ずる要路にあたり、いにしへは、しば〳〵戰場

となりしところなり、その他和泉に堺港、大和に郡山等の都會あり。

名勝舊蹟また隨て多く、いまことごとくあぐべからず、中にも吉野山の櫻花は一目千本と稱し、我國第一の勝地にして、世人花をいへばまづ吉野を擧ぐ、春時の光景れ

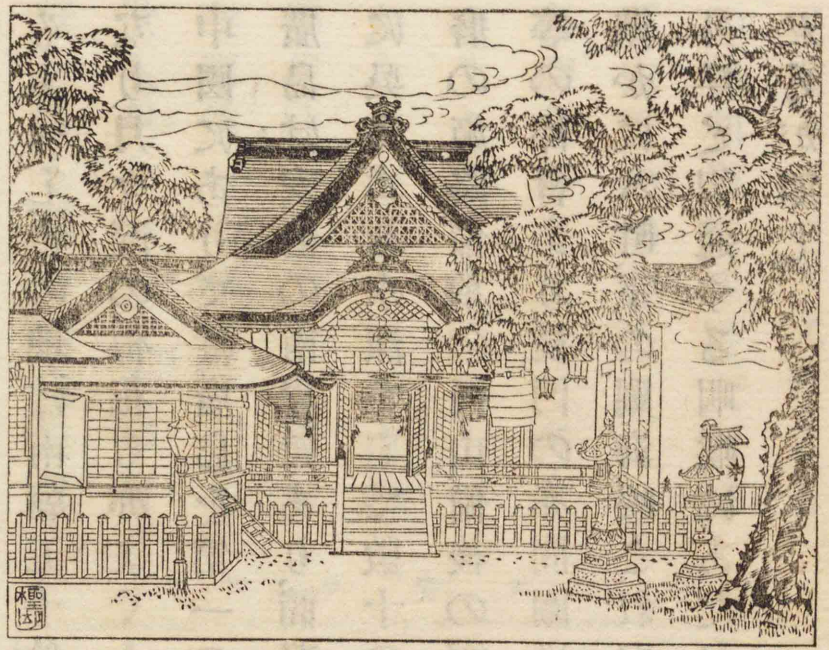
赤間關の圖



もふべし、この地は南朝五十餘年の行在所たりしところなり、月ケ瀬の梅花も、亦よく人の知るところたり。

中國にありては、廣島を第一の都會とす。

廣島は安藝の南岸にあり、商況頗る盛なり、廣島の東南岸に吳港あり、水深くして數十の軍艦をいるべし、その他播磨の姫路、備前の岡山、備後の福山、因幡の鳥取、出雲の松江等の都會あり、長門の赤間關は、對岸九州の地を距ること僅かに八町、下の關海峽これなり、市街海にのぞみ、內海と外洋と相通ずる咽喉にあたれるを以て、內外船舶の往來れるが如し。



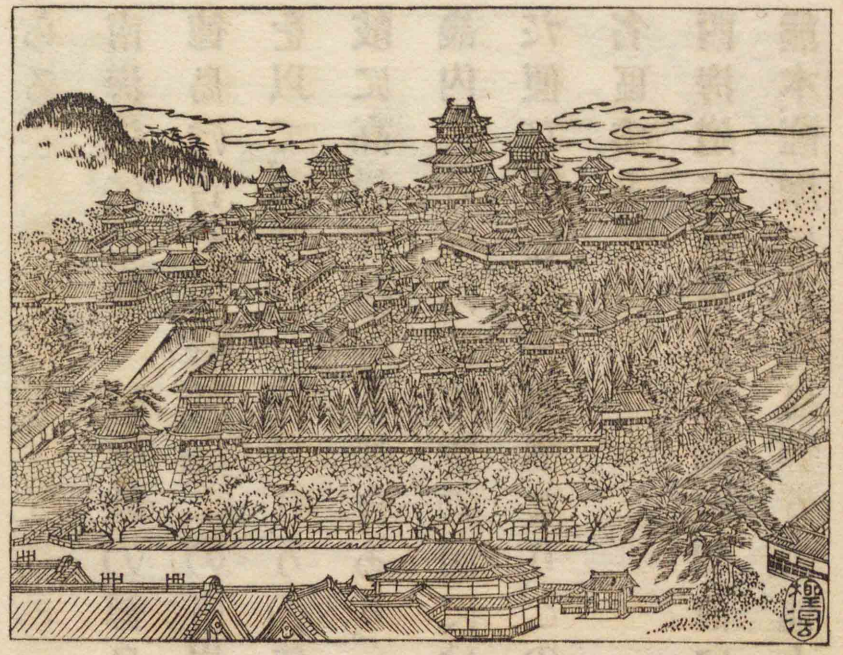
金比羅神社の圖

勝景の地は丹後に天の橋立あり、一帶の砂洲長く海中に斗出し、青松とれをれはふ、安藝に嚴島あり、廣島を距ること南の方八里、島中に市杵島（イチキシマ）姫（ヒメ）を祭るを以てまた宮島の稱あり、共に風景秀麗にして、陸前の松島とともに、日本三景と稱せらる。

南海道にありては、阿波の德島を第一の都會とす。德島は吉野川（また四國三郎と稱す）の南岸に位す、水陸運輸の便あるを以て、商業頗る盛なり、その他伊豫に松山、土佐に高知、讃岐に高松、丸龜等の都會あり。

畿内にひたる紀伊の國には、和歌山あり、海陸の交通甚だ便なるを以て繁華なり、この國には熊野、高野、和歌浦等名區多し。

西海道には筑前に福岡、肥前に佐賀、筑後に久留米、肥後に熊本、薩摩に鹿兒島等、その他大都會頗る多し、福岡と市街



熊本城の圖

相つらなりて博多あり、博多織を以て著名なり。

熊本は九州第一の大都會にして、加藤清正の築きし城郭、今なゝ存在せり、西南の役、賊をこの城にてさゝへしは、人のよく知るところなり。

琉球の沖繩(オキナワ)島には那覇(ナハ)港あり、本嶋第一の要港

第四圖參照

にして、沖繩縣廳のあるところなり、その東方一里餘に首里城あり、もと琉球藩王の居城地たり。

交通

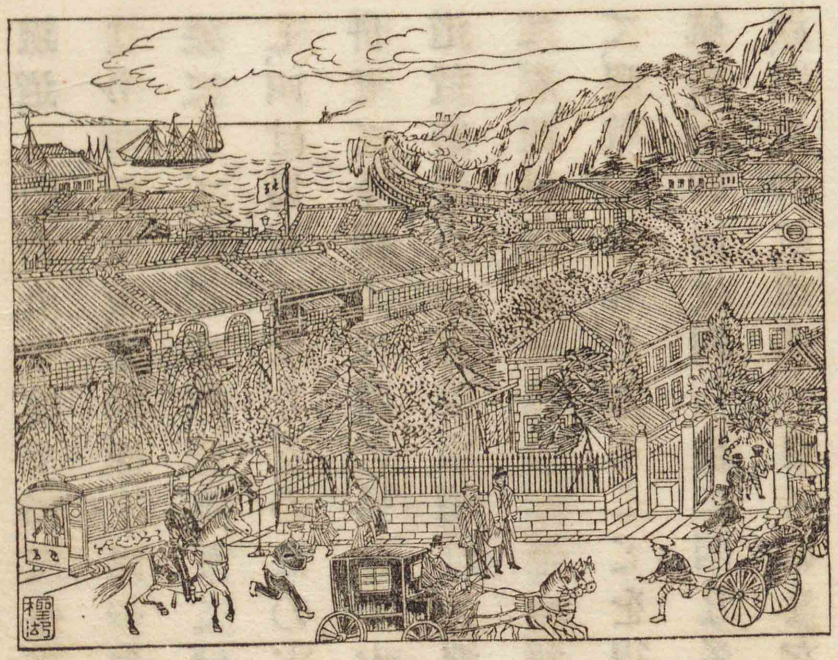
近年全國の道路を修繕して、嶮峻なるところには隧道を通じ、河川には橋梁を架して、往來を便

那覇の圖

にしたるのみならず、陸には鐵道あり、海には滊船あり、之を二十餘年前の我國に比すれば、交通の便利なること、殆んと別天地の觀あり。

東京は四方交通の中心にして、京都に至るには東海道あり、むかしは五十三次と稱して、有名の道路なりき、また中山道あり、上州高崎をへて近江の大津に至る山道なり。陸羽街道は、東京より宇都宮、福島をへて仙臺にいで、青森に達すべし、また福島より米澤、山形を經て、青森に達する道路あり。

その他甲州街道、水戸街道、陸前濱街道等あり、北陸には、北



文明の現象圖

陸街道貫通し、幾内には山田路、大和路通じ、中國には中國、山陰二街道あり、四國九州にては、多くは海路の便によりて、陸路によるもの少く、北海道は内地漸く開けたれども、鐵道または船便によるもの多く、陸路を行くもの少し。

鐵道。　明治五年はじめて東京、横濱の間に鐵道を通じてより、神戸、大坂、京都間之につぎ、ろの後鐵道の敷設ますく盛にして、今や本州にありては、東京より東北は青森に達し、西は馬關に至り、ろの他の支線と北海道、四國九州とを併せて、全國の線路の長さ、千七百哩餘に達せり、而して鐵道賃錢は、ほゞ官設鐵道は一哩につき一錢貳厘五毛にして、私設鐵道は一哩につき一錢なれば、旅人は賃錢について、哩數の大畧を知ることを得べし。

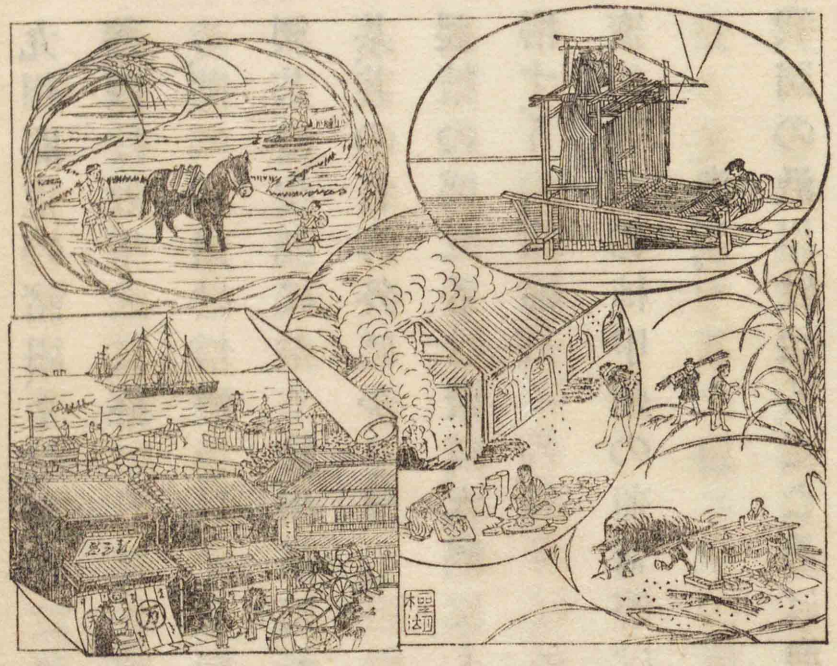
航路。　我國は四面海に圍まるゝが故に、船路の便多く、河湖、内海の航通すべきものまた少からず、日本郵船會社は、横濱にありて、横濱を中心として内外諸港と航通をなし、大坂商船會社は、大坂を中心として、專ら關西の運漕を業とせり。

郵便。　我國の郵便は、明治四年に東京、大坂、西京の三府間に設けられたるをはじめとし、今や全國至るところとして、郵便の達せざるなく、海外諸國へも音信を通ずると容易なり。

電信。　明治二年東京、横濱間に架設したるものを、我國電信の初めとし、爾來全國に及ぼし、延いて海外に達せり、電話機の設も近年大に増加せり。

氣候。

我國は南北に長くのびたる國なるが故に、各地の氣候大に差異あり、然れども概して九州の南端より、東海道の犬吠ケ崎に至る間は、冬日と雖も氣候温暖にして、それより以北北海道の根室に至る間は、氣候寒冷にして温度の差甚たし、今東西兩岸の寒暖を比較するに、北日本にありては、西岸は東岸よりも温暖にて、南日本にありては西岸は東岸よりも少しく冷なり、而して海岸に瀕せざる中央部は、寒暖の差甚た大にして、西南地方は一般に暖く、中山道及び奥羽の地は、土地高きが故に寒冷なり、殊に北海道に於ては寒氣頗る強し。



生業の圖

生業及び産物。

農業。我が國民の生業は、農業を第一とす、農産物の重なるものは、米、麥にして、米の良質を以て著名なるは九州にして、殊に肥後、筑前等最もあらはる、麥の最も多く産する地を武藏とす、四國

九州關東の諸國、また麥作に著名なり。

養蠶は近年大に盛にして、各地至るところに行はるれども、繭の產出は信濃を最とし、製絲の業は上州を推せり。

製茶は生絲につぐ輸出品にして、山城、伊勢、駿河、遠江等の茶、其の名海外にかぐはし。

製糖の盛なるは讃岐、大隅にして、阿波の藍は海內無雙と稱す、その他綿花に名高きは、尾張、三河、河內にして、紀州の蜜柑、美濃の柿、甲州の葡萄等は皆著名の產物なり。

漁業。

我國の沿岸は至るところに漁業行はる、中にも北海道に於ける鮭、鱒、鯡の產出は、最も盛にして、南海にては鰹、鮪等最も多しとす、その他各地の海岸、漁業若くは製鹽の利あらざるなし。

工業。

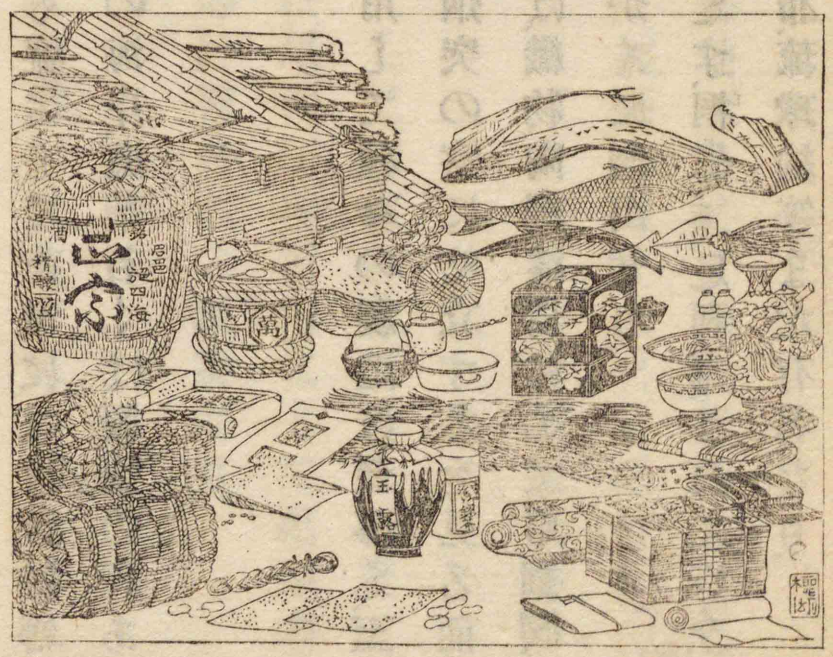
維新以來、西洋の器械を採用して、種々の製造に從事し、至るところの大都、名邑には、烟突の空に屹立するを見る而して製造品の重なるものは、織物、陶器、漆器にして、彫刻物、紙類、酒、醬油等いづれもさかんに製出せり。

絹織物は京都を以て第一とす、桐生(上野)、足利(下野)これにつぐ、木綿は河內を推す、越後上布、琉球紬等また有名なり。

陶器は、各地とも多少の産出なきにはあらざれども、肥前の伊萬里、尾張の七寶、加賀の九谷、京都の清水燒等最も著名なり、漆器は、東京及び京都の蒔繪最も名たかく、會津（岩代）、能代（羽後）、輪嶋（能登）等また多く産出せり。

製紙は土佐、駿河、美濃等

産物の圖



盛にして、酒は攝津の池田、伊丹を推す、醬油は下總の流山と、野田とを以て第一とす。

商業。

内地の商業は、東京と大坂とを二大中心として、各地の貨物皆この中心によりて集散し、以て相互の有無を通せり。

外國貿易は横濱を第一とし、神戸これにつぐ、輸出品は生絲を第一とし、茶これにつぐ、米、石炭、銅及び陶器、海産物等またこれにつぐ、輸入品の第一は、綿及び綿絲にして、石油砂糖、機械、器具類等亦その重なるものなり。

邦土の分畫。

我が國邦土の分畫は、その由來頗る遠く、人皇の始祖神武天皇の御時、已に定まれる國名あまたありき、其後成務天皇の朝に、山河を界して、國縣を分ち、大に國道の分畫を明にしたまひき、文武天皇の朝には畿内七道、六十六國となり、明治初年に至りて奥羽の二州、更に七國に分れ、北海道の十一國加はりたりしより、今は畿内、八道、八十五國となれり、而して制度の都合によりて、これを道廳、府縣に分ちて、一道廳、三府、四十三縣とせり、今左にその名稱と、管轄區域及び、置治の都邑をかゝぐ。

道廳府縣	置治都邑	管轄區域	廳地の東京を距る里程
北海道廳	石狩札幌	北海道一圓（十一國）	二百七十六里
東京府	武藏東京	武藏の内一市九郡伊豆の内七島及び小笠原島	
京都府	山城京都	山城丹後一圓及び丹波の内五郡	百三十一里
大坂府	攝津大坂	攝津の内一市七郡及び和泉河内一圓	百四十四里
神奈川縣	武藏横濱	武藏の内一市三郡及び相模一圓	八里
兵庫縣	攝津神戸	攝津の内一市五郡丹波の内二郡及び播磨但馬淡路一圓	百五十里
長崎縣	肥前長崎	肥前の内一市六郡及び壹岐對馬一圓	三百四十四里
新潟縣	越後新潟	越後佐渡一圓	百〇九里
埼玉縣	武藏浦和	武藏の内十七郡及び下總の内一郡	六里
千葉縣	下總千葉	下總の内八郡及び安房上總一圓	十里

第五圖參照

茨域縣	常陸水戸	常陸一圓及ひ下總の内六郡	二十九里
群馬縣	上野前橋	上野一圓	二十八里
栃木縣	下野宇都宮	下野一圓	二十七里
奈良縣	大和奈良	大和一圓	百四十里
三重縣	伊勢津	伊賀伊勢志摩一圓及ひ紀伊の内二郡	百十三里
愛知縣	尾張名古屋	尾張三河一圓	九十五里
靜岡縣	駿河靜岡	遠江駿河一圓及ひ伊豆(七島を除く)	四十六里
山梨縣	甲斐甲府	甲斐一圓	三十四里
滋賀縣	近江大津	近江一圓	百二十八里
岐阜縣	美濃岐阜	美濃飛驒一圓	百〇四里

長野縣	信濃長野	信濃一圓	五十九里
宮城縣	陸前仙臺	陸前の内一市十三郡及ひ磐城の内三郡	九十二里
福島縣	岩代福島	岩代一圓及ひ磐城の内十一郡	七十一里
岩手縣	陸中盛岡	陸前の内一郡陸中の内一市十七郡及ひ陸奥の内一郡	百四十里
青森縣	陸奥青森	陸奥の内一市八郡	百九十二里
山形縣	羽前山形	羽前一圓及ひ羽後の内一郡	九十五里
秋田縣	羽後秋田	羽後の内八郡及ひ陸中の内一郡	百五十一里
福井縣	越前福井	若狹越前一圓	百三十七里
石川縣	加賀金澤	加賀能登一圓	百五十九里
富山縣	越中富山	越中一圓	百〇八里

鳥取縣	因幡	鳥取	因幡伯耆一圓	百九十四里
島根縣	出雲	松江	出雲石見及ひ隱岐一圓	二百二十一里
岡山縣	備前	岡山	美作備前及ひ備中一圓	百八十六里
廣島縣	安藝	廣島	備後安藝一圓	二百三十一里
山口縣	周防	山口	周防長門一圓	二百六十六里
和歌山縣	紀伊	和歌山	紀伊の內一市八郡	百六十一里
德島縣	阿波	德島	阿波一圓	百七十八里
香川縣	讚岐	高松	讚岐一圓	二百〇七里
愛媛縣	伊豫	松山	伊豫一圓	二百三十七里
高知縣	土佐	高知	土佐一圓	二百三十四里

福岡縣	筑前	福岡	筑前筑後一圓及ひ豐前の內六郡	三百〇三里
大分縣	豐後	大分	豐後一圓及ひ豐前の內二郡	三百十七里
佐賀縣	肥前	佐賀	肥前の內一市十郡	三百十四里
熊本縣	肥後	熊本	肥後一圓	三百二十五里
宮崎縣	日向	宮崎	日向の內九郡	三百六十八里
鹿兒島縣	薩摩	鹿兒島	大隅薩摩一圓及ひ日向の內一郡	三百八十一里
沖繩縣	沖繩島	那覇	琉球諸島	五百七十四里

日本小地理上卷終

明治廿六年十二月六日印刷
明治廿六年十二月九日發行

（日本小地理上卷奥附）
定價金拾一錢

發行者　小野英之助
北豐島郡南千住町元地方橋場町
千三百八十番地

發兌元　富山房書店
東京市神田區裏神保町九番地
（電話番號千〇六十二番）

印刷者　橘磯吉
東京市京橋區弓町廿三番地

印刷所　三協舍
東京市京橋區弓町廿四番地
（電話番號千三百八十四番）

版權所有